「ヨーロッパ市民社会と辺境／マイノリティに関する歴史的研究」
《ブラハ・国際ワークショップ》について

槇原 琢

本研究（科学研究費補助金 基盤研究（A）の目的は、文明の「辺境」と「マイノリティ」の生成を、近代ヨーロッパにおける市民社会の形成のメカニズムと関連させながら歴史的に解明することにある。

2006年度は特に東ヨーロッパの研究者との交流を目的とし、日本およびチェコのブラハにおいて数回の準備研究会を行った後、チェコ共和国科学アカデミー哲学科研究所において2007年３月22日国際ワークショップ「市民社会の相対化—チェコと日本の視点から」を開催した。

ワークショップでは、ヨーロッパ近代に形成された歴史像を相対化するための方法論、非ヨーロッパ世界、マイノリティを周縁化する視点を批判的に検討する可能性について論じられた。日本とチェコのそれぞれの「外国史」研究者が出会うという点で稀有な機会であったが、体制移行を経験したチェコ社会・チェコ史学と、日本の研究者との間に共有される論点も多かった。

哲学者研究は、哲学、思想史研究のみならず、思想史と社会史との接点、『intellectual history』もまた研究領域としている。受け入れの中心となったウラディミール・ウルバーネク氏は、近世中央ヨーロッパの思想史研究、わが世にも常に化